

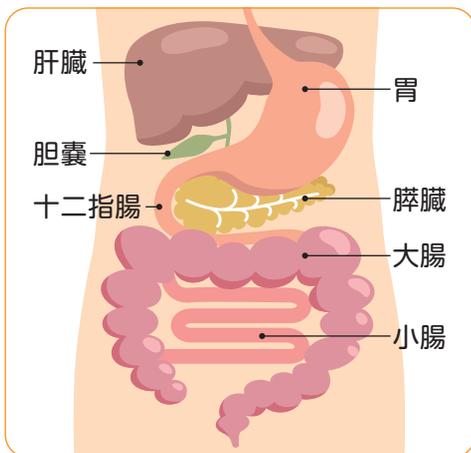
# 当院のNST活動と 入院患者さまの栄養について

その1



## NST (Nutrition Support Team 栄養サポートチーム) という言葉を聞かれたことはありますか?

食事や栄養は、私たちの生命を維持するうえで無くてはならないものです。闘病中の患者さまにとって、栄養状態を良好に保つことは、病気の回復促進、合併症予防、治療に耐えうる体力維持のために大きな役割を果たします。また食事は、人間の生活の楽しみでもあります。治療中でも「おいしい」と感じながら食べることは、患者さまの生活の質を高めるうえで重要です。



『消化管』(特に小腸)は、人間の体の中で最も大きな免疫臓器であり、正常に機能していれば、全身の免疫系のおよそ60~70%は消化管が担っているといわれています。小腸や大腸などは、消化管に入ってきた食物(栄養)を自らの栄養源としていますので、消化管に食物(栄養)が入ってこない、消化管の粘膜細胞が萎縮してしまい、正常な機能(消化吸収や免疫)を失ってしまいます。また、小腸の粘膜が萎縮することによって、消化管内の菌が体内に入り込み、感染症(バクテリアルトランスロケーション)を起こしてしまうこともあります。

“栄養”を摂取する場合、『経腸栄養』と『経静脈栄養』の大きく分けて2種類の栄養摂取方法があります。

『経腸栄養』には、「経口栄養」(口から食事を食べる)と「経管栄養」(経鼻胃管やPEG:経皮胃ろう・腸ろうから栄養剤を注入)があり、『経静脈栄養』には、「末梢静脈栄養」(腕などの細い血管からの、薄い濃度の栄養輸液)と「中心静脈栄養」(鎖骨下静脈などの太い血管からの、濃度の濃い栄養輸液)があります。『経静脈栄養』はどちらも直接血管に点滴を行います。

経静脈栄養のみでは消化管を使用しないため、前述の通り消化管機能の低下を招く恐れがあります。また、血管に針を挿入すること自体が、感染症の原因となる可能性があります。

そのため医療現場では、特別な場合を除いて『経腸栄養』を第一選択としています。一番自然なのは経口栄養ですが、嚥下(のみ込み)障害のある方など、口から食事が十分に摂取できない場合には、経鼻胃管やPEGなど、患者さま・ご家族の意向も考慮しながら、適切な栄養摂取方法を選択しています。

当院でも、昨今高齢の入院患者さまが多く、入院のきっかけとなった病気や病状期間・基礎疾患の有無にもよりますが、経口摂取量が低下し低栄養に陥っている方が多い傾向です。このような患者さまは、低栄養に伴う食べる意欲の低下・廃用性摂食嚥下機能低下・認知機能低下が問題となり、食事摂取量がなかなか確保出来ない状況に陥りやすいです。このような患者さまがNST介入対象症例となる事が見受けられます。

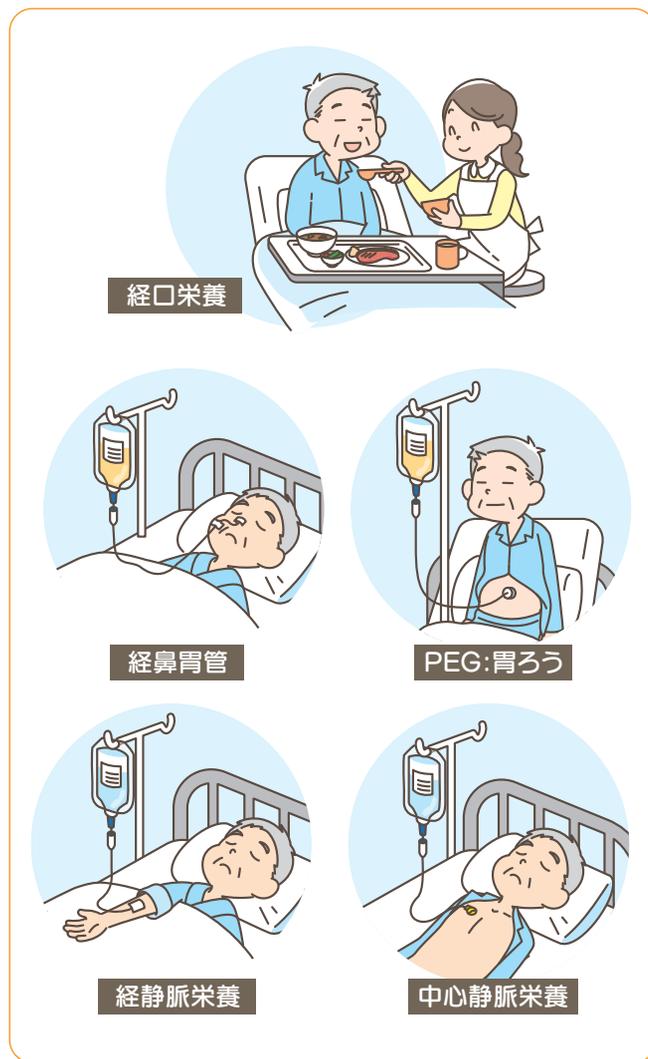
NSTとは、Nutrition support team(栄養サポートチーム)の略名です。

NSTのはじまりはアメリカです。1968年にS. T. Durickが中心静脈栄養(Total Parenteral Nutrition、以下、TPN)を開発したことにより、これまで経口摂取が難しく、栄養障害をきたしていた多くの患者さまを救いました。TPNの普及に伴い、医師をサポートするコメディカルスタッフの需要が高まりました。それぞれの専門職種が栄養管理や輸液管理などを担当し、チームとして連携するようになったことで、現在のNSTへ発展してきました。

日本でNSTが普及し始めたのは1998年ごろです。アメリカではTPNを主としてNSTが発展していった事とは異なり、日本の栄養管理は静脈・経腸・経口すべてに一貫した対応をしていることが特徴です。栄養障害のある患者さまだけでなく、潜在的にリスクを持っている患者さまも見落とさない点が、日本独自のポイントとなっています。

今号は栄養を中心に説明させていただきました。次号では「当院のNST活動」についてお伝えいたします。

栄養サポートチーム 院長 川崎 晋吾



➡ 次号は「当院のNST活動と入院患者さまの栄養について その2」です

四字熟語

### 刻露清秀(こくろせいしゅう)

秋の気候や景色のさっぱりと清々しいさま。

- 10月1日(火)~10月31日(木) 乳がん月間/臓器移植普及推進月間/骨髄バンク推進月間/健康強調月間
- 10月1日(火)~3月31日(月) 赤い羽根共同募金運動 ●10月1日(火) ピンクリボンデー
- 10月8日(火) 糖をはかる日/骨と関節の日 ●10月10日(木) 目の愛護デー
- 10月13日(日) 世界血栓症デー ●10月14日(月) スポーツの日
- 10月16日(水) グリーンリボンデー ●10月17日(木)~10月23日(水) 薬と健康の週間

